
侍の道 ～己の逝く道～

貧弱戦士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

侍の道 ～己の逝く道～

【Nコード】

N7058X

【作者名】

貧弱戦士

【あらすじ】

侍……それはもう滅びかけている時代。けど、決してその魂を忘れない男『仁』。彼は数年ぶりに阿弥浜から戻ってきた。昔世話をした三姉妹や、同じ道場に通った茂呂……彼は皆のため、自分のためにこの街を変える

一の道侍？

唐突だが、俺の名前は仁

苗字はとつくの昔に捨てた、田舎侍だ

侍とは、気高く孤高のかっこいい男なのだ！！

決して……決して！！

仁

「は、吐くな……ど！！ げろげろげろげろ！！！」

「お侍さん、大丈夫ですか？」

仁

「お、おおう。平気へい……げろげろげろ！！！」

やべえよ、何かかつこ悪いよ

もしこれをあの三姉妹や茂呂に見られたら、完全に馬鹿にされる所だった

しかし、何でえこんな波が激しいんだ

……おおう！？

すると、俺の目の前に大きい黒い船が目映った
で、でけえ……こんなデカイの見たのは江戸城以来だ

「黒船ですねえ。まあ、ここら辺も変わりましたよ。最近は般若党とか変な集団が出てきて、お役人はあっちへこっちで」

仁

「か、可哀相だな……」

「お役人も大変でしょう」「いや、般若何とかの方」え……」

だって、捕まったらどうせ拷問だろ

もし拷問があるなら、あの三姉妹がやるんだろうな……背筋が……！

そんなこんなで、何とか無事に阿弥浜に着いた

さあ、まずはあの三姉妹にご挨拶でもするかなあ

しかしこんな昼なのに、なんでえこんな騒がしいんだ

中央には人溜まりが

仁

「まあいいや。んじゃあおっちゃん……！ またな！」

「またのご最良を！ ありがとうござえあす」

颯爽と俺も人込みの中に入った

すると……

「幕府の犬が！！ 死ねええ！！」

「攘夷が！ 日本の屑が！！」

『ガキン！ ガキン！』

黒い奴らと赤い奴らがお互い殺しあっている
なんだあてめえら？ こんな昼に殺し合いなんて、礼儀知らずが
俺は前の女の人を退かして、ズンと前に出た

????

「へ……」

赤い奴

「おいお前！！ 急に出てきて何者だ！！」

仁

「俺かあ？ 俺は皆がもう絶滅種だと思い込んでいる……侍様だ」

黒い奴

「お前が……侍か！？ 刀はどうした！！ 侍の魂は」

魂？ あれが魂か？

呆れた……まさかそんな考え方がまだ居るなんて

仁

「飾りなど、俺には不必要何でね」

???

「!? (な、なんなのこの人……)」

黒い奴

「お、お前ええ!! 許さん!! ハアアア!!」

赤い奴

「お前など、侍などではないわあああ!!!!」

一斉攻撃かよ

さすがに、その行動も仁義じゃねえよな？

俺は斬撃を見事に避け、一人づつ一発殴った

「「ぐわ!?!」」

仁

「本当にめんどくせえなあ……しやあねえ!! 纏めて相手してやらあ!!」

殺し合いを止めるなんて、俺は何てかつこいいんでしょう
なんて、思っている場合じゃねえよな

一の道侍？（後書き）

感想をください！

二の道 実力

仁

「さあ、お前らの魂……見せてくれ？」

右手を前に出し、指を曲げる

今の俺はカッコいいねえ。何か底から燃えてくるよ

赤い奴

「この野郎!!」

中々の速さだが、俺から見れば止まって見れるぜ

俺はそれを受け流し、裏拳で倒した

しかし、これじゃあ時間が掛かるな……

はあ、此処に茂呂が居れば楽なのに……

仕方ない、異人から貰ったアレを付けるか

懐から黒い布を取り出した。それは丁度手に嵌めて、感覚を試している

黒い奴

「なんだそれは!!」

仁

「ん？ ああ。これは手袋っつーんだぜ？ 異人から手に入れた、俺の特注品でね。この中に鉄が入っているんだぜ？ かけえだろ」

黒い奴

「意味がわからんぞ!! 神妙にしろおお!!」

黒い奴

「うおおおおお!!」

だ〜から、今の俺は無双状態なんだってば

黒い奴ら……いや、黒子達で

黒子達が俺に刀を振ってきたので、俺はそれを左一本使って防ぐ

『ガン！ ガン！』

黒子

「な、何!? 斬れていない……だと!?」

黒子

「我々の刀が!!??」

もう使えない刀になっている

はは、ざまあ見ろってんだい馬鹿野郎!

心の中で思った、俺であった

しかし、なんつー数なんだ

めんどくせえから、まずは一番強そうな奴を倒すか!!

善は急げ。周りを見渡す

???

「ぎゃー!!」

???

「ふん、取って食おうとはしない」

なぬ!? おのれ、あいつ……!!

あんな幼女に手荒な真似を……許すまじ!!

仁

「待て待て待て待てえ!!」

???

「あん、なんだテメエ。この毛唐の肩を持つのか」

仁

「ああん!? 毛唐でも、その以前に娘だろ。テメエ、それでも男
かってんだい!!」

???

「面白れえ。相手してやるよ」

男はデカイ……っか、長い刀を取り出した
いやゝ、さすがに強そだな
しかし、こんな男を許すわけにはいかねえな。成敗してやる

???

「誰だか知らねえが、助かったぜ」

ん? その声……まさか
聞こえた声主を俺は見た

間違いない、あのくせ毛みたいなのは…

仁

「茂呂か？ 茂呂だな!!」

茂呂

「ん？ お前さん……誰だ？」

仁

「俺だよ!？ 仁だってば!!」

忘れるなんて、悲しいぜえ
昔の旧友だろ？ な？

茂呂

「仁？ 誰だか知らねえな」

そ、そうか

俺はあの時、まだ名前が無かったんだ……
なら、今すぐ思い出させてやるよ

仁

「名無しだ!! 名無し!」

茂呂

「!!?? お前さんかい!? そうか……仁って名前かあ」

思い出してくれたのか、懐かしそうな顔をしている
そうだよ茂呂。俺だよ

本当に久しぶりだな、おい!

???

「ええい!! いいから掛かって来んか!! この「邪魔!!」が
はっ!?!」

『ドーン!!!』

「「うわあああ!!??」」

余りにも邪魔だったので、一瞬で終わらせた
まき沿いくらった諸君、すまんね
けど今は思い出が一番だから

茂呂に近づく

仁

「あの時以来だな……どうだ調子は？」

茂呂

「お前も相変わらず、馬鹿強いなあ。けど、今はその強さ……この阿弥浜には必要だぜ。よし！！俺も昔を思い出しますか！！」

仁

「やっぱり拳が一番だよな！ 茂呂」

茂呂

「おうよ！ 名無し……いや、仁！」

俺達は同じ構えになった
俺と茂呂が習った、体術

仁

「『夕張流体術』！ 仁、いざ参る！」

茂呂

「『夕張流体術』！ 茂呂 茂、押して行く！」

俺達は殺し合いしている所に突入し、拳を振るった

俺と茂呂の連携はまさに完璧だ

俺が危険になりそうだったら、茂呂の拳や蹴りで防いでくれる

楽しくなってきたきたきたー！！！！

仁

「はい、これにて終了!! 解散! 解散!!」

茂呂

「はぁ、さすがに疲れた」

俺達の周りには、倒れている者達がかなり居る
全部俺や茂呂だな
さあ、旧友に会ったんだ。何か奢ってもらおうかな?

???

「おや、もう終わりですか? 私、まだやってないのに」

???

「まだまだこれからよ!! おい! 茂呂さんの隣に居るやつ! 相手しろ」

???

「私達、一度滾ったのは戦わないと震えないので……ねえ」

二の道 実力（後書き）

感想をください！！

次回！

三の道 残虐姫君三姉妹

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7058x/>

侍の道 ～己の逝く道～

2011年10月18日23時27分発行